

蘆花日記
七

大正七年八月
—大正七年十二月

蘆花日記 七

昭和六十一年七月三十日初版第一刷発行

定価四五〇〇円

著者 徳富蘆花

監修者 中野好一
横山春夫

校注者 吉田正信

発行者 布川角左衛門

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

郵便番号 一〇一—九一

電話 東京(〇)七六五—(営業)

東京(〇)六七—(編集)

振替 東京 六一四—二三

印刷 明和印刷株式会社

製本 株式会社鈴木製本所

落丁・乱丁本はお取替致しませ

監修 中野好夫

横山春一

校注 吉田正信

題字 金子鷗亭



大正9年5月5日、千歳村粕谷の自宅庭にて。前列左から筒井八重、
妻愛子、蘆花、中野八千代、後列、篠田島、篠田秋。

校訂凡例

- 一、原本は縦書き、横書きの両方があるが、本書ではすべて縦組みとした。
- 一、原本の、挿入位置の不確かな欄外書き込みは、本文の行の頭に●を付し、原則として原本と同一ページの適当と思われる箇所に挿入した。
- 一、原本では、日付の上に○のある日とない日があるが、読みやすさを考え、本書ではすべて○を付した。
- 一、本書では、新字体を用いた。異体字等も対応する新字体に改めたが、著者常用の漢字（嶋、冨、貞、鋼など）は、一部原本どおりとしたものもある。かなづかい、送りがなはすべて原本どおりとした。
- 一、濁点、句読点の脱落は、筆記の性質と読みやすさを考慮して、適宜補った。
- 一、難読文字には適宜ふりがなを付したが、著者自筆のふりがなには（ ）を付してこれを区別した。
- 一、誤記、誤字には、その右横にママを付し、必要な場合には、その下に正しいと推定できる文字をへゝで囲んで挿入した。
- 一、脱字と考えられるものは「」を付して補った。
- 一、判読不能の文字は□で示し、判読不完全の文字は、右横に？を付した。右横に付された？のうち、著者自筆のものには、（ ）を付してこれを区別した。
- 一、本文中で説明が必要と思われる人名・事項については、「」内に6ボ活字での割注、または同一日付の末尾に別注を付した。注は新字体、新かなづかいを用いた。

蘆花日記

七

（大正七年八月一日）
大正七年十二月三十一日

目

次

大正七年

八月一日（山から海への記）

八月十四日（山から海への記 下巻）

九月一日

九月二日（夏游から帰つてからの記）

十月一日

十一月一日

十二月一日

解題
索引

三

四

七

八

一九

三四

四五

五九

五二

大正七年
(八月一日)
十二月三十一日

○八月一日 (木) 晴〔七月一日より、妻愛子とお手伝いさんの芳子を連れて旅に出、北陸をへ岡山県玉島町(現、倉敷市)郊外の金光教管長の別荘に來てゐる〕

●夏遊も二月目になつた、悠々と中国に來て納まつて居る。

昨夜も寝そびれ、十二時過ぎからさめて、いろいろ日に話しかけられる。大抵齡の上庄の話。起きて日を小舟にのせる。

其前に水浴。

●水上警察の巡查さん來訪。

早速昨日のまづい写真が中国民報に出て來る。山陽新報にも、朝の六時に玉嶋に着いて八重〔前井八重、東京女高師學生、前年九月の來訪以後、親しくなつた〕が先導したなどの記事が出る。

乙嶋〔玉島町の字名〕の高師出の森脇某が他の一名と來訪。児嶋巡拝の話、押切舟〔鮮魚を早く運ぶため、帆を用いず、櫓だけで航行する船〕の出港入港の話など。

三嶋中〔漢學者、二松學會の創立者、東京帝大教授〕も此近辺の産さうな。

今日は下〔下〕へ舌〔舌〕ビラメニ、小カレイ一、蝦〔エビ〕十尾も買ふ。五十錢也。

安原某來訪。先夜玉嶋で会ふた彼の兄也。八重のマタイトコになるといふ。舟を貸してくれたも彼の由。肥料商也。読者也。三十人の大家内と云ふ。水嶋鯛を一尾くれた。

彼の妹が海水浴に來て居るさうで、其方に托した小包と郵便を取り寄せてくれた。手紙は牧辰二〔愛媛省、台灣民政部勤務〕をはじめ色々、小包は秋〔お手伝いさん、上祖師ヶ谷の住人篠田金五郎の娘〕から。

玉嶋は二千戸(町のみ)追々衰微するといふ。

山陽新報の周藤二郎と云ふのが來た。新聞記者責任論をして聞かす。八重の事を色々聞く。女學生で、何でもないてな事を答える。

其八重は勝手に居て料理の手伝などして居る。今朝八重來ず、其姉は熱が出たやうに云ふたから心配して居たら、やがて來た。熱が出たのでないと謂ふ。熱を出すなら玉嶋を直ぐ立つて了ふと余云ふ。

●八重の宿から蛤をくれた。

午餐には水嶋鯛の刺身がうまい。彦三醬油が初めて役立つ。八重の姉にも少し持たしてやる。返礼に鮮しづをくれた。四郎は実は士朗以下「士朗」「士郎」の表記が偽（在しているが原本のままとした）だつた。姓は察しの如く柚木。俺が久榮女史（山本久榮。蘆花の初恋の女性。新島襄の妻の姪）に書いてやつた男名の封筒に書いたのが「柚木」だつたから不思議に思ふ。

八重は四時過ぎ帰る。

今日は玉嶋の天神祭で、舟で行く筈だつたが、風が少し強いので、見合はせる。

朝鮮の娘等が散歩すると思ふたら、それは紡績の朝鮮女工だつた。

夕方隣の親方來話。女児は亡弟の孤女で、今一人は妻の連れ子であるさうな。然し細君も今身重であるといふ。三十六年海水浴の笑話。

水嶋へ行く水舟——120石積、水嶋まで往つて水共貳円七拾錢位と云ふ。一年300円も儲ければ立ち行く云々。

塩飽七嶋しわくの話。真鍋嶋の話。肥料桶を頭にのせる高見嶋の女の話。鯛網の話。鯛のうまいは七八百目位。

●登利屋（カツ。東京女高師学生）の手紙。

倉敷の女学校教師と云ふ男が来て、話は朝鮮になる。其男と親方の間に行はれる。

●隣の亭主、不如帰の事を云々する、夫婦の仲を好くする云々。

其処に士朗が先日話した水彩を持つて来る。力ある描き方だ。借りて置く。

士朗と話すと骨が折れる。矢張弱身やうしんへ味あじを見せまいとするからだ、と思ふ。それはいけぬ。

皆で波打際の材木に腰かける。蚊が食ふので、日が俺の足を砂に埋めてくれる。空が星だらけになる。日の提議で水瓜を食ふ、八重の姉も呼ぶ。俺の右には士朗が居る。日の左には八重が居る。

あとで八重の日に語るところによれば、士朗はだんまりであまり人に話さぬ男で、今度の様にしゃべる事はないと云ふ。嬉しいのだ。士朗と八重は今好い楽しい時代だ。Bless them!

氷がまだ少し残つて居るので、皆が去つた後で葡萄酒をのむ——水瓜のあとを少々懸念しながら。此家の W. C. は、肥満の余に骨が折れる。明日から蜜柑箱を手の支へに置くことにする。

今夜は裏の戸を障子にあらため、東枕に寝る。

○八月二日（金）晴

福一〔福水一良。出版社。福水書店の経営者〕を雞姦する夢を見てさめる。

日を舟にのせて漕ぐ。八重をも、と思ふたが、八重は来なかつた。丸山に行く。舟を繋いで、嶋に上る。また嶋を一周する。而して舟をつないで水浴する。

帰ると客が待つて居る。朝乳を済ましてから対面。倉敷の酒屋の子、早稲田の英文科生。神経衰弱で一年ばかり休学して居る云々。

福岡附近の癩病嶋、屋嶋附近の肺病嶋の話。

森田節斎〔幕末の儒学者。志士〕は倉敷の人。

金光中学の教師仁科と云ふのが士朗と共に来た。其内金神様へおまゐりに行く約束をする。

今日も新聞に出て居る、我儕と八重と。大阪朝日に出た夫婦の写真は、中国民報と同一原型に拠つたらしく、余程好くとれて居る。

午后一睡。其間に娘を連れた女客があつた、と後で隣の亭主が語る。

隣の亭主がそろそろ pay court to Madame をはじめ。隣の細君が氣にして警戒する。俺も警戒する。然し逃げたり躲れたりを馬鹿らしく思ふ。

風呂に亭主が案内に来る。俺が出たあとで、日の入浴中も近づかうとする。隣の Madame の警戒する容子が知れる。

日も少々弱つて帰る。これから芳（お手伝いさん、上祖師ヶ谷の住人、篠田兼五郎の娘）を連れて入浴しろ、と命ずる。

九十九里の惣七（萩井惣七。大正六年夏、避暑生活を送った九十九里浜の貸家業莉の舎の裏に住んでいた百姓）が何処にも居る。中原（淳藏。妻愛子の異母兄。省の妻の兄。九州帝大教授）は何処にも居る。それを恐れたり逃げたりしては生活は出来ぬ。此方の力を養ふ大切な朋友なのだ。

金神の管長と佐藤某の關係。切腹した佐藤某。

隣の細君の曰く、エラクなれば先方からわざわざ写真をとりに来て礼を云ふて帰る。

髻を剃る。

玉嶋にも少しいや氣がさす。

何時引きあげるかも知れぬ。

兎に角筒井の家にも挨拶して置かう。

そこで夕飯を終へると、日と芳を促して、急いで宿を出る。直ぐ汗になる。

先づ筒井宅を訪ふ。婆さん二階に請ずる。二階は裏川から円通寺（曹洞宗の古刹。良寛修行の地）に対し、好い眺めだ。夕栄の雲が美し

く、丘の灯が美しい。

婆さんはお時（山梨県のキリスト教徒。徒丹沢正作の妻だつた）の母を思はせる。夫に苦勞したらしい。隆公（川井隆。八重の実姉）が居る。安原の弟が来る。隆

公が遥照山を教へる。milk shake の馳走になり、高田飴と葛の花、姉にリズム模様の半襟を贈る。

安原宅に寄る。父なる人に対面。蘇峰を云々する。安原の兄、無理に中途まで送つて来る。

画はがき、葡萄酒、氷、など買ふ。一寸細君（ちよつと）と芳を見はぐる。

大汗になつて、丘を上つて帰る。細君、晴着もめちやになるとて憤激。鹿の子の着物が濡れても構はぬを云々する。

直ぐ斯様な時に久栄が出て来る。其時に此方がオトナにならねば、喧嘩になる。

帰ると、ランプをつけて八重が待つて居る。先刻芳をやつて、筒井の家に行くと云はせたに、筒井が来ぬを夫婦とも

不快に思ふたが、八重は彼の借宅に来ると思ひ違へたと云ふ事が分かつた。

三人海浴。燐光、螢の如く散る。

上つて氷水を飲む。

八重を芳に送らして帰へす。姉のおすみも先刻筒井宅に帰つて居た。

○八月三日（土） 晴 午后八十九度〔氏華〕

今朝は夫婦で舟で乙嶋の沖に遊びに行く。

秋の手紙と大阪三越の細君の帯を安原の子供が持つて来た。

安原の男が舟の苦くるしみを持つて来た。

泣菫〔薄田泣菫。詩人、随筆家。大、阪毎日新聞社学芸部副部長。〕、伊達俊光〔大阪毎日新聞社社員〕、福一、彦三〔鹿子木彦三郎。実姉河田光子の夫。大阪商船勤務〕に画はがき出す。

午餐に鰯を噛み、八重の手に汗を飛ばす。

八重の腋臭わきがを発見し、氣の毒になる。

安原の使再び来り、尨大な金沢田宮〔金沢の呉服店〕の上布類を届ける。景物の包も。

今日はじめて郵便が直接に来了。井原本町〔現、井原市〕の桑田鳴海から「芦花」の印を刻し、筆跡を求めて来た。山川省

三はがき。

八重、終日在り。

日の「荊棘いばらの路」〔相馬泰三の小説〕を読むを聞く。

夕食後、三人で八重の寓に行く。

午前に八重の宿の亭主福武石松が蛤かきをくれた。

帰ると、安原の妹が話に来る。材木に腰かけて話す。

彼女の名をおもとさんと余、中てる。（第一におもとと直覺したが、また迷ふておしげと云ふた。然し第二におしげ